

やまのべ 偉人伝心 (安達峰一郎編)

16. 「戦後の世界平和構築案」立案の使命を帯びたベルギー公使赴任

●第一次世界大戦の中へ

メキシコ公使を免ぜられた峰一郎は、大正6(1917)年5月にヨーロッパのベルギー公使(4年後に同大使)に任命されました。その当時、ヨーロッパではイギリス、フランス、ロシアなどの連合国とドイツ、オーストリア、イタリアなどの同盟国が植民地をめぐる対立。大正3(1914)年になると戦争が始まり、たちまちヨーロッパ中に広がる第一次世界大戦となりました。峰一郎の任地ベルギーは当初中立を宣言したのですが、ドイツがフランスを攻めるためにベルギーに侵入したので、ベルギー政府はフランスの港町に疎開するという状況でした。

峰一郎は、そのときの本野^{もとののいちろう}一郎外務大臣や石井^{いししい}菊次郎元外務大臣から、戦後の講和会議で日本の対応策や平和構築案を戦争体験に基づく提案ができるようにと期待されての派遣でした。

●最後の帰省

峰一郎はベルギーへ出発する直前の8月にわずかばかり時間をさいて帰省しました。そのとき両親と撮った写真や生家の入口に腰をおろしている写真が残されています。

また、山辺小学校を訪問してヨーロッパ諸国から贈与された勲章をつけた写真に「大正六年八月廿^{にじゅう}九日西歐大戦之^{ちまた}赴任スルニ際シ帰郷シ山辺母校ニ進呈ス」と自筆の署名をしたものや小さい



帰省時に両親と撮った写真

いとき小鳥海山の杉に「大人になったら、おまえのような大物になるぞ」と誓ったという杉が伐採されていたのを悲しんで、「悲鳥海山之失冠」という書も残していきました。このときが峰一郎の最後の帰省となったのです。

●峰一郎一家の必死の渡欧

9月に、夫人、長男の太郎、家政婦の松本とみ、それにオランダ公使になった武富敏彦^{たけとみとしひこ}、功^{いさお}(長女)

夫妻と共にベルギーに出発しました。このとき、すでに日本は日露戦争のとき結んだ日英同盟を理由にドイツに宣戦布告していたので、ドイツからの攻撃を避けながら、シベリア鉄道を使い、スエーデン、ノルウェー、イギリス経由で約1カ月半かけての必死の渡欧となりました。途中北海通過のときにはドイツ軍から激しい攻撃を受け、スエーデンやデンマークの新聞では、安達公使はドイツ軍に攻撃されて死亡したと報じられました。しかし峰一郎一家は無事にベルギーに着任し、国王に信任状を奉呈することができました。

着任後も激しい戦争を目の当たりにしましたが、1年後の大正7(1918)年11月、ドイツ側の降伏によって第一次世界大戦は、一般市民を含む約1,600万人という、これまでにない多数の犠牲者を出して終わりました。

●ベルギーでの功績

その後峰一郎は、戦火でやられたベルギーの復興に尽力しました。

先日、ベルギーのルーヴェン・カトリック大学の、W. F. ヴァンドワラ教授が山形大学にお出でになって、「安達峰一郎とベルギーとの関係～ルーヴァン大学への日本の図書寄贈事業を通して」という演題で講演されました。また、松尾剛次教授がルーヴァン大学を訪問し、かつて日本から寄贈された図書を確かめてきたことも話されました。それらの話から、同大学の図書館が第一次世界大戦で焼失したので、各国に図書の寄贈を呼びかけたところ、安達公使は早速日本政府に働きかけて、日本国内に寄贈のための組織をつくり、住友、岩崎、三井、古河、渋沢などの財閥から6万円(現在の約12億円)の寄付を受け、図書1万3,682冊を寄贈したといえます。さらに、当時ヨーロッパでは日本の文化はほとんど知られていなかったもので、日本文化紹介の拠点にしようと広い分野の、しかも古典も含めた多彩な図書を寄贈させたといえます。

その功績が認められ、ルーヴァン大学から名誉法学博士号が贈られました。

文：山辺町ふるさと資料館長 佐藤^{つとむ}継雄